

1 月第 3 週の礼拝説教

- 日 時：2025 年 1 月 19 日（日）10：30～11：30 降誕節第 4 主日礼拝
- 説 教： 保科けい子牧師
- 聖 書：新約：マタイによる福音書 4 章 12～17 節（新約 P5）
- 説教題：「 光が射し込む 」
- 讃美歌：51（愛するイエスよ、われらここにあり。）
205（今日は光が 造られた日よ、）

毎日寒い日が続いています。12 日（日）、13 日（月）の連休後は医療機関も通常体制になりましたので、インフルエンザやコロナウイルス感染症の患者数の報告が激増しているそうです。どうぞ皆さま、くれぐれも体調にお気をつけください。けれども、そのような中でも、立川教会の庭の木々は新芽が見え出しました。春の訪れを祈りつつ待ちたいと思います。

さて、本日の聖書箇所のマタイによる福音書 4 章 12 節から 17 節は、洗礼者ヨハネから洗礼を受けた後に主イエスがヨルダン川周辺からガリラヤに退かれ、公生涯の活動への準備期間として湖畔の町カファルナウムで住まわれたことから語り出されています。マタイによる福音書は紀元 80 年ごろに記されたと言われていいますので、紀元 70 年ごろに記されたと言われるマルコによる福音書の記述の内容を見聞きすることができたわけです。そういうわけで、マタイによる福音書 4 章 12 節と 17 節はマルコによる福音書 1 章 14 節と 15 節を参考にしながら記していると考えられるのですが、その中間にマタイによる福音書 4 章 13 節から 16 節の記述を挿入しているように思われます。いわば、その箇所にマタイによる福音書の著者の考えが示されていると言えましょう。

12 節は、「イエスは、ヨハネが捕らえられたと聞き、ガリラヤに退かれた。」と始まります。洗礼者ヨハネの逮捕はイエスの今後の運命をも暗示するものと言われていいます。「捕らえられた」と訳されている元の言葉のギリシア語は、やがて主イエスご自分の受難について予告されるときに、「人の子は人々の手に引き渡されようとしている」とお語りになりますが、そこで「引き渡されようとしている」と受け身の形で用いられている言葉と同じです。このことについては、単に主イエスの身柄が敵対者たちに引き渡されるということだけではなく、この出来事の背後に神のはからいがあることを暗示していると言われていいます。「ヨハネが捕らえられた」という出来事についても、現実にはヘロデ王の命令であるにしても、その王の行為もまた神のはからいのなかにある、ということを示唆するものと理解できるということでしょう。ですから、この事件はやがて主イエスにも同様の危険が起きることを暗示していると考えられるのです。そして、このヨハネが捕らえられたという出来事は、主イエスのガリラヤでの本格的な活動の契機

となります。

13 節から 16 節の内容は、最初に申し上げたように、マタイによる福音書だけにみられるものです。14 節で「それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。」と記されているように、15 節から 16 節は、イザヤ 8 章 23 節から 9 章 1 節の「8:23 先に／ゼブルンの地、ナフタリの地は辱めを受けたが／後には、海沿いの道、ヨルダン川のかなた／異邦人のガリラヤは、栄光を受ける。9:1 闇の中を歩む民は、大いなる光を見／死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。」という預言の言葉に多少手を加えた引用です。「異邦人のガリラヤ」とありますが、ガリラヤ地方は紀元前 8 世紀にアッシリアに征服されて以来、バビロニア、ペルシア、ギリシア、ローマと、歴代の征服者に支配され続けたところでした。その結果、異邦人の流入が後を絶たず、人種も宗教も混交状態となったため、「神から選ばれた民」と自らを誇るユダヤ教徒からは、異邦人のガリラヤと軽蔑されていたのです。マタイによる福音書の著者がこの預言の言葉を引用したのは、主イエスがガリラヤで宣教されたという事実は預言の言葉の成就である、ということをはっきりと示すためでした。そのようにして異邦人のガリラヤで始められた主イエスの宣教は、やがてこのマタイによる福音書の終わりの 28 章 19 節から 20 節で「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしてください。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、20 あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」に見られるように、異邦人、すなわちすべての人々に向けられた宣教を生み出すことになりました。マタイによる福音書では、たびたび旧約聖書を引用しますが、それは旧約聖書のみ言葉が主イエスの出来事の意味を私たちに理解させてくれ、また、イエスの出来事によって、旧約聖書がわたしたちにとっても生きたみ言葉に変わってゆくからです。

17 節にまいりましょう。「そのときからイエスは」と、主イエスを強調しています。「悔い改めよ。天の国は近づいた」というみ言葉は、すでに洗礼者ヨハネの口からも語られていましたが、霊の力を伴った神の支配は、この主イエスの活動から始まるのです。ヨハネがユダヤの荒れ野でそれを宣べ始めたのに対し、主イエスはその宣教を最初から異邦人も共に住むガリラヤで始められました。そのことは、かつての旧約聖書の時代には選ばれた民イスラエルに向けられていた神の救いの告知が、いまや異邦人のガリラヤ、すなわち、僻地だったガリラヤに始まり、やがて全世界に向けられるようになるということです。ここでの「天の国」とは、空間とか領域ではなく、神の御支配という動きそのものを言い表していると言われます。「悔い改めよ」という呼びかけがあることにより、神の主権を認めようとしないう人々がみな、その主権を認めるように招かれていることがわかります。ある方は、「悔い改めよ。天の国は近づいた」というみ言葉を、「悔い改めよ。なぜなら天の国は近づいたのだから」と訳すことができる文であり、「悔い改め

よ。そうすれば天の国は近づく」というような条件付きのユダヤ教の期待を表す文ではないと指摘されています。16節をもう一度読んで見ます。「暗闇に住む民は大きな光を見、死の陰の地に住む者に光が射し込んだ。」と記されています。ここには、やはり、先だって大きな光があり、その光が死の陰の地に住む者に射し込んでくるという光景が描かれているのではないのでしょうか。それは、私たちが悔い改めるという条件付きで見えるようになったり、射し込んで来たりするものではないということでしょう。けれども、本当に天の国、すなわち主なる神様の御支配が近づいたということを知った者は、悔い改めて主イエスの福音を信じる生き方へと変えられていくのではないのでしょうか。私たちの心にも、一筋の光が射し込んで春に向かって歩むことができるように、祈りましょう。